

反核医師ジャーナル

第49号

発行：核戦争に反対する医師の会

2003年10月30日

vol.21

No.2

(名古屋市昭和区妙見町19-2)
愛知県保険医会館気付
TEL052-832-1345

原爆症の認定求めて集団訴訟



名古屋地裁前で、入廷前に140人余りの支援者とともにガンバローとシュプレヒコールをする甲斐昭さん（前列左から3人目）

「被爆者集団訴訟支援、被爆行政の転換、核兵器廃絶をめざす被爆者支援ネットワーク」は、「裁判で、私の病気は『原爆のせいであり、原爆症である』と国に認めさせたい」と勇気を持って立ち上がった入市被爆者の甲斐昭さんを先頭に、名古屋地裁の第一法廷（大法廷＝定員100人）を毎回傍聴者で満員にしようとがんばっています。7月23日から第1回口頭弁論が始まり、第2回弁論が10月15日に行われました。次回第3回弁論は12月4日午前10時半から行われます。

◇被爆者を支援するため、ぜひ「支援ネット」へのご入会と、裁判所に公平な判決を求める署名へのご協力をお願いします。詳細はP.12～14の記事をお読みください。

イラク人医師と語り合う会

「湾岸戦争後の子どもたちの健康被害とイラクの今」

ジャナン・ハッサン医師からの報告

今、イラクの子どもに何がおきているか



ジャワード・アル・アリ医師
(バスラ教育病院癌センター長)



ジャナン・ハッサン医師
(バスラ母子病院・小児科医)

核戦争に反対する医師の会は、イラクにおける劣化ウランの被害を伝えるために来日した二人のイラク人医師、ジャワード・アル・アリ氏、ジャナン・ハッサン氏を招き、八月十一日(月)午後八時から「イラク人医師と語り合う会」を開催した。会場の伏見会議室には、医師・歯科医師のほか市民ら百五十人が詰めかけた。

両医師は、セイブ・イラク・チルドレン名古屋(代表・小野万里子弁護士)などが支援し来日したもので、名古屋・広島・長崎・東京で四十回以上の講演を行い、イラクの子どもたちが白血病や癌、先天性奇形など深刻な健康被害を受けていることを報告した。

大きな腫瘍に冒された患者や、先天性奇形をもつ赤ちゃんなど目を背けたくなるような多数の症例が報告され、参加者は大きな衝撃を受けた。以下、両医師の講演要旨を紹介する。

イラクの南部にバスラという都市があります。そこでは今、多く

の子どもたちが先天性異常をもつて生まれてきます。一般的には、先天性異常がおこる原因として、二〇％は遺伝子の変異、五〜一〇％が染色体異常、そして、五〜一〇％は母親が催奇性の物質にさらされた結果であると言われています。しかし、バスラの場合は三つ目の原因、つまり母親が催奇性物質にさらされた結果、奇形が生じるという割合が高く、少なくとも一〇％以上になっています。

劣化ウラン弾は電離放射線を放出します。電離放射線は貫通性が非常に高く、人体に変異を及ぼす原因の一つと考えられています。つまり、劣化ウラン弾の影響を受けた母親あるいは父親から生まれた胎児は、この電離放射線にさらされ、発達段階で数々の異常が現れる可能性があるのです。

一九九一年の湾岸戦争時、米軍

とその同盟軍がイラクに攻め込み、劣化ウランを含んだ大量の武器を使用しました。バスラの植物、土、

水を調査すると、放射能のレベルが非常に高く、受け入れ難いレベルに達していることが分かります。

現在様々な研究が行われていますが、研究は今から述べる仮説の上に成り立っています。

一九九一年の湾岸戦争以降、バスラ住人がこの電離放射線にさらされた可能性はある。そしてその結果、先天性異常の発生率が非常に高まっている。

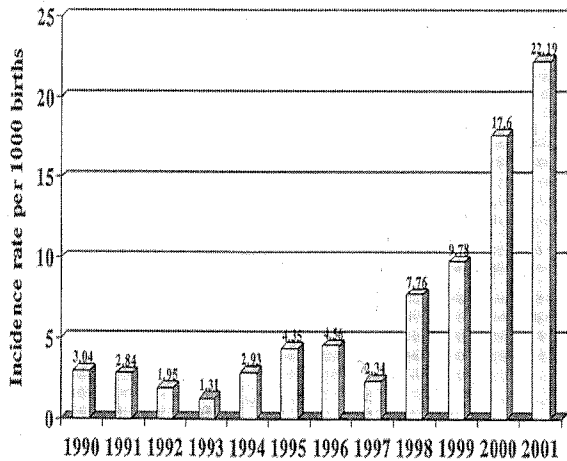
バスラ住民が浴びた電離放射線のレベルは、自然放射線のレベルを遙かに超えていた、というものです。

先天性奇形の急増

実際に、様々な先天性奇形の頻度を年代別に比較してみると、湾岸戦争前と、それ以降では、明らかに増加していることがわかります。髄膜脊髄瘤、無脳症、多発奇形、先天性心疾患、膀胱外翻、アザラシ肢症、口唇口蓋裂、臍帯ヘルニア、軟骨形成不全、食道閉鎖、鎖肛、横隔膜ヘルニア、水頭症、関節拘縮症、単眼などが確認され

ています。特に数が増えている先天性奇形は無脳症と多発奇形です。九〇年ではそれぞれ三例と七例でしたが、九九年から〇一年の三年間には六七例と二二四例に急増しています。さらに、アザラシ肢症は九〇年にはゼロでしたが九九年から〇一年には七五例というように多くの発生が報告されるようになりました。

さて、左表は全出生数に占める先天性奇形の数がどのように増えていったかを示すものです。あくまでも、私が勤めている一病院のみの数字です。バスラ市内には、出産ができる病院が他にも五つあ



りますが、それらの病院は含まれていません。

戦争前の九〇年には、総出産数に対して先天性奇形をもつ子どもの数が三七で、これは一〇〇〇の出産に対して三・〇四%という数字でした。これが〇一年になると二五四、割合でいうと二二・一九%という数字になり、実に七倍に増えたということになります。

こうした研究から、我々は次のような結論に達しました。まず、こうしたイラクの状況下にあつて、先天性異常が非常に増えているということは、三千ミリラドを超えるレベルの放射線を妊娠している女性が浴びた結果と考えてよいのではないかとということです。

次に、二つ目の結論としては、電離放射線を父親の方が浴びた場合、つまり、受胎、生殖、そしてその後の発達の段階で電離放射線を父親が浴びた場合は、先天性異常との因果関係については、まだ結論を出すことができないということです。

今後、これらのような仮の結論に最終的な判断を出すためには、最近行われるようになった細胞遺伝学的な研究がさらに必

バスラの15歳以下の子どもが罹患している癌の種類

	1990	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
白血病	15	15	14	25	24	24	24	30
悪性リンパ腫	2	4	1	5	8	8	9	19
脳腫瘍	1	4	3	2	5	6	2	2
Wilms腫瘍	1	3	2	4	1	—	—	3
神経芽細胞腫	—	—	—	—	—	3	4	6
その他	—	1	1	—	—	2	3	5
計	19	27	21	36	38	42	42	65

要と思われまふ。吸収線量とDNAを調べることによって、それが染色体に異常を起こしたという因果関係がはっきり、細胞遺伝的な研究によって確立されると考えるからです。

しかしながら、経済制裁の影響下にあるバスラでは洗練された技術あるいは研究機関がなく、このような研究をすることができないのです。

子どもたちを襲つ癌、白血病

右表はバスラにすむ十五歳以下の子どもたちがかかっている癌の

15歳以下の子どもにおける白血病の発症数

	4歳以下	5~9歳	10~15歳	計
1990	2	9	4	15
1993	5	6	4	15
1994	5	5	4	14
1995	10	9	6	25
1996	10	10	4	24
1997	10	10	4	24
1998	10	9	5	24
1999	14	11	5	30
計	66	69	36	171

状況について調べたものです。湾岸戦争前は、合計しても十九件という数でした。それが、九九年になると六十五件と非常に増えていきます。そして、最新の〇二年ではこれが一九六件と報告されています。

十万人当たりの発生率にすると、九〇年では約三・九%でしたが、九九年では一〇・七%と三倍増になっています。さらに〇二年ではこの発生率が、五倍以上の数字になっています。

次に、子どもたちの悪性疾患の発生状況を地域別に見ると、ズビエラという地域で癌の発生率が非常に高くなっていることが分かります。ズビエラはバスラの中でも非常に戦闘が激しかった地域です。ここでは九九年に癌の発生率が

最も高くなりました。しかし、〇二年になるとバスの中心地域でも癌の発生率が高くなったのです。

おそらく、放射性を帯びた物質が風で運ばれて、ズビエラ以外の区域に癌の発生が広がっていったと考えられます。今や、バスラ市街では劣化ウランに汚染されているものはなくなってしまうと言っても過言ではありません。

水も、土壌も食料も汚染されていますし、我々が毎日吸っている空気さえも汚染されているという状況です。

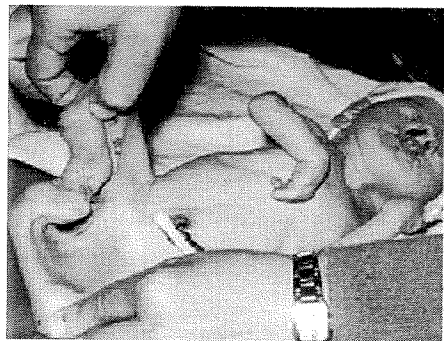
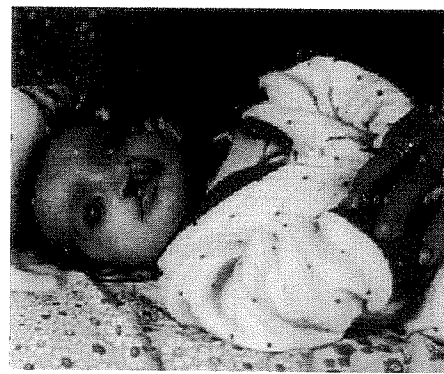
白血病の増加も深刻です（前頁右下表）。四歳以下の本場に小さい子どもの中でも、白血病が増加していることが分かります。九九年の段階では、四歳以下の子どもに

おける白血病の新しい発症の数は十四件でしたが、〇二年では百件以上にまで増加しています。

今回の訪日中に、広島・長崎で医師の方々とお話しし、広島・長崎の原爆投下後、子どもたちの間で白血病が非常に増えたということとを聞きました。これは、イラクの現在の状況と同じです。

「この子たちを直視して下さい」

さて、ここからは、実際にバスラの子どもたちが癌にかかり、先天異常をもって生まれてきた様子を写真でご覧いただきたいと思えます。この写真はすべて、私が勤めているバスラ母子病院で撮影されたものです。そして、同じく籍を置いているバスラの大学医学部の



の協力を得ています。出産時の奇形、異常をもった赤ちゃんが生まれたと言うことは広島・長崎でもそうだったと聞いています。口唇裂を病んでいる赤ちゃん

です（左上写真）。口唇裂は戦争前にも発生がありました。戦争後は、数が大きく増えました。

髄膜瘤と下肢に奇形のある赤ちゃんです（左下写真）。多発奇形が主な病気だったのですが、生殖器が認められず性別が分かりませんでした。また、両目が最後まで一度も開きませんでした。

子どもたちの悪性疾患、癌についても述べたいと思います。バスラでは、リンパ腫にかかる子どもが、戦後非常に増えました。特に小さな赤ちゃんに見られるのが特徴です。経済制裁を受けているバスラでは、お金がなくて化学療法をしてあげることができません。この子（右下写真）は、八カ月で亡くなった赤ちゃんで、神経芽細胞腫という病気を発症する前後の写真です。既に亡くなっています。

普通、神経芽細胞腫の治療には四種類の薬を使用するのですが、そのうち我々が入手できるのは二種類だけという状況です。

次の写真（次頁左上）は、これまでになかったような異常をもつ子どもたちです。この写真を見てバスラにおこった現実を直視してほしいと思います。

この肉の塊というのか、

頭もなければ手足もないの

ですが、

私は小児科医です

ので、子ども

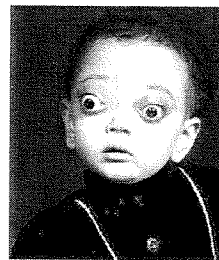
々な病状について知っていますが、

これは、一体何が起ったのかと頭を抱えるばかりでした。この異常が劣化ウランによって引き起こされた可能性は一〇〇%に近いと思います。また、イラクのバスラ

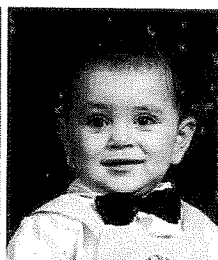
という都市の子どもにおこっただけではなく、従軍した米軍兵士の子どもにも奇形をもって生まれているケースもあるということをおきたいと言っています。

ここまで見てきたように、劣化ウランの影響というのは大きく二つあります。一つは、化学毒性によるもの、二つ目は放射線・放射能によるものです。

化学毒性によるものというのは、劣化ウランを含んだ物質を吸うなどして吸収した場合で、これはす



After

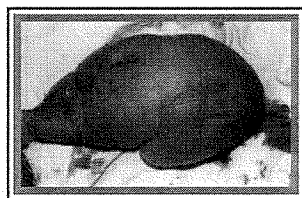
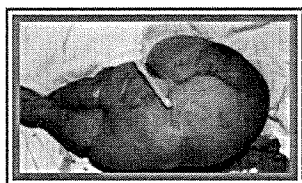


Before

ぐに結果が見えます。その結果、気管や肺、胃が冒され癌になったりします。そして比較的早く影響が現れるというのが特徴です。その一方で、放射線・放射能によるものは、組織、骨、骨髓そして細胞などに影響を与え、DNAそして染色体の異常に至ります。この劣化ウランの放射能の面での影響が目に見えるようになるのは、かなり長時間経過してからになります。父親あるいは母親が被曝し、

しかし、被曝したときには子どもたちがまだ生まれていなかったとしても、生まれた後、将来癌になる可能性が高くなるという非常に深刻な状況にあるのです。

現在のイラクでは経済制裁を受けているために高度な研究を行うことができる場所がありません。我々はこれらの遺伝子的な調査を切望しています。



ジャワード・アル・アリ医師からの報告

劣化ウランと放射能

最初に、劣化ウランについてお話しします。ウランは非常に硬い金属で、鉄の二・五倍の硬さをもっています。比重が十九と大きいいため、戦車を貫通させるほどの威力を持っています。高温あるいは湿気が高くなった場合に完全に着火するという特徴をもっています。ガンマ線、アルファ線、ベータ線の三種の放射線を放出します。この三つの放射線の中で最も重要なのはアルファ線です。半減期は四十億年を超えています。つまり、劣化ウランがその放射性を完全に失うためには二百五十億年かかるということになります。

アメリカでは、原子力発電の結果、廃棄物である劣化ウランがたまっており、約百万トンの劣化ウランを抱えています。アメリカはこの劣化ウランをなるべく早く処理したいと考えているのです。アメリカは凶人や知的障害者に対して、つまりアメリカの自国民に対して様々な研究や実験を行ってき

●劣化ウランとは●

原子力発電や核兵器のエネルギー源には濃縮ウランが使用されています。原子核分裂させるためには天然ウランに含まれているウラン 235 が必要ですが、天然ウランには 0.7% しか含まれておらず、99% 以上はウラン 238 です。

核分裂を連続して引き起こすために、ウラン 235 の含有比率を原子力発電用には 2 ~ 4% (核兵器用には 90%) まで高めて燃料にします。濃縮ウランができると、一方で 235 の含有比率が 0.7% より低いウランが廃棄物として残ります。これが劣化ウランです。したがって劣化ウランのほとんどはウラン 238 です。ウラン 238 の半減期は約 44.7 億年です。

劣化ウラン弾は、戦車や装甲車などの堅固な標的を破壊するために弾心に劣化ウランを使用した砲弾のことです。

ました。したがって、アメリカは劣化ウランがどのような放射性、発癌性、催奇性、毒性を持ち得るかについて、熟知した上で大量破壊兵器として使用したのです。

イラク全土が劣化ウランに汚染されている

劣化ウラン弾は湾岸戦争の際に歴史上初めてイラクで使用されました。少なくとも見積もっても五百トンから八百トンの劣化ウランがイラクに投入されたといわれています。そのうち、三百トンはバスラの西部に投入されたとい積もられています。その結果、バスラ市民の四五%が、劣化ウランを原因とする疾病に罹患するリスクをもつ

ていると試算されています。しかし、バスラだけではなく、イラク全土で劣化ウランは使用されたので、イラク国民、イラク全土が劣化ウランの影響下にあるといえます。

通常の自然放射能のレベルは一キロの土当たり七十ベクレルという数字です。この通常レベルの百上千倍の数値が湾岸戦争後検知されたとイラクの原子力委員会は報告しています。劣化ウランの粒子を含むゴミ、埃の類が拡散し続けたわけです。汚染を受けた面積は全体で二千平方キロメートルと試算されています。

放射能・放射線のレベルが非常に高かったことの直接的な結果と

して、九一年のイラク侵攻後、癌の発生が非常に増加したことがあげられます。そして、胎児の奇形異常、流産が増加しました。また、この劣化ウランの金属のもつ毒性の結果なのか、戦後、筋障害、神経障害、腎機能不全の患者が増加しました。

変化する癌の発生パターン

まず、大きな変化として、通常高齢の人がかかるような癌に若い人がかかるようになりました。そして、一つの家族あるいは部族が同じ癌に冒されるケースが増えてきました。さらに、一人の患者が二つ三つの部位の癌に苦しむようになったのです。こうした特徴は

バスラ全域にわたって一様に広がっています。これはバスラ全域が例外なく劣化ウランによって汚染されたことを示しています。バスラは、東はイラン、南はウエートに接しています。バスラの西にかたまっている*印は劣化ウラン弾の着弾点を示しています。

非常に頻度の高い乳癌、肺癌、白血病、リンパ腫、大腸・小腸癌の発生がどのように分布しているか調べました(左上図)。このパーセンテージを見ると数字に差がありますが、地域ごとの人口密度がかなり違いますので、その人口密度で相殺すると、五種類の癌の分布はかなり一様であるということが言えます。

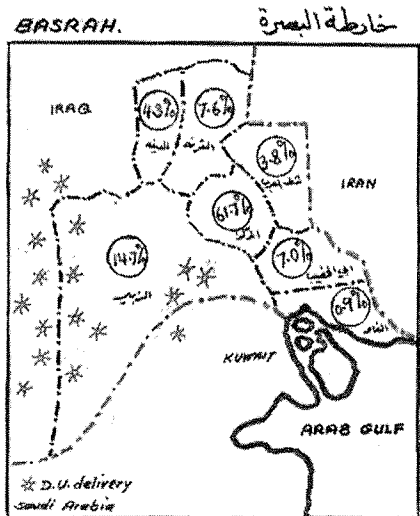
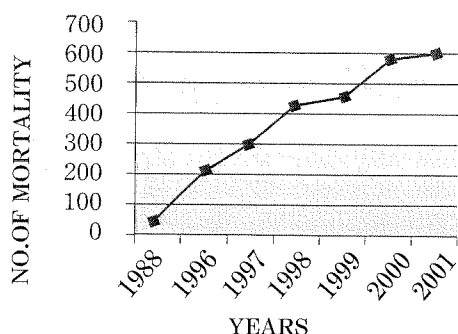


Fig1. Distribution of 5 common Cancers.



公式に登録されているバスラに

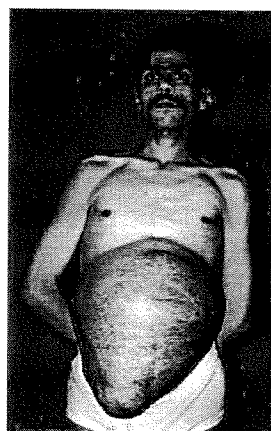
おける癌の発生数を紹介すると、八八年は人口一〇万人に対して十一件という発生数でしたが、九八年には七十五件、〇一年には百十六件、〇二年には百二十三件に増えています。十二年間の間に、癌の発生件数が、十倍以上に増えたということ、統計的有意差をもった変化といえます。

左の表は癌による死亡者数がバスラでどのように変化したかを示したものです。八八年には三十四人でしたが〇一年には六百三人に増加しています。〇二年の数字も示されましたがさらに増加し六十四人になりました。約二十倍という驚くべき数字です。

この患者さんを見て下さい(右下写真)。私の経験の中でも、これほど腫瘍が大きくなったのは初めてです。この種の腫瘍というのは放射線・放射能と関係があると考えざるを得ません。

唯一の変化は劣化ウランの使用

第一に申し上げなければいけないことは、九一年の湾岸戦争の勃発以前も、発癌の要因はイラクに



存在していたということです。しかし、癌の発生率はそれほど多くなかったのです。それが、湾岸戦争以降癌の発生率が急増したわけです。このように戦争前と、後を比べてみると、様々な発癌性の要因が以前からあったにせよ、その中で、唯一の変化というのは劣化ウラン弾によって放射線を我々が浴びたということです。劣化ウラン弾が使用されたというのは確かなわけですから。

二つ目としては、これまでになかったような異常な事態が起きていくということです。具体的には家族性の癌が増加していること、このような状況は戦争前にはなかったものでした。私が見ているだけでも五十六の家族がありますし、私の同僚も同じくらいの癌家族をみていますので、異常な事態といえるでしょう。

さらに、一人の人間が二つ、三

つの癌に同時にかかるということも、これまでにはありませんでした。また戦後、先天性異常の子どもたちが非常に増えたということも具体的な証拠となるのではないのでしょうか。

我々に残された仕事は

こうして苦しむ人々の組織に、金属つまり劣化ウランが存在しているという直接証拠を見つけることが我々に残された仕事と考えています。直接証拠を突きつけないと、アメリカ政府は人体に影響を及ぼさなかったと言い続けるでしょう。ですから、影響があったのだということを経証立てるために、我々が友人だと考えている日本人の方々からのご支援を期待したいと思います。

今回のイラク戦争でも劣化ウラン弾は実際に使用されています。一つの試算ではバスラの近郊だけでも五百トンの劣化ウラン弾が投入されたといわれています。

最後に、私たちは皆様方と共に協力して活動をしていきたいと考えています。そして、大量破壊兵器の廃絶に向けて、そして、劣化ウラン弾の廃絶に向けて、そして、

平和な世界の構築に向けて皆様方と共に活動していきたいということとをアピールとして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

会場からの質問

◇イラクに劣化ウラン弾が投入され、これからも多くの被害者がでると思われるが、被害者の増加を抑えるような防止策はあるのでしょうか。また、薬剤の不足について、どのような援助が可能でしょうか。

◇すでに使用されてしまった劣化ウラン弾については、それから身を守る有効な手段というのはあり得ないということです。現在でもバスラ市内全域で七十五万人、総人口の四五％は劣化ウラン弾の影響下つまり汚染された地域で生活しているのです。なんらかの形で劣化ウランの粒子がすでに体内に入ってしまったっています。その体内に入った微粒子が実際に目に見える形で影響を及ぼすのには時間がかかります。癌を発症する前に亡くなる方も多いでしょうし、五年、十年を経過して癌を発症してお亡くなりになる方も多いでしょう。

薬については、確かに薬剤が不足している一方で、薬剤だけで完治できる癌は限られています。多くは、治療完治を目的とするのではなく、緩和的に使用されます。ただ、子どもの白血病やリンパ腫に対しては、有効に投薬を行えば完治する可能性があるかもしれません。

小野万里子弁護士からの訴え

(セイブ・イラク・チルドレン代表)

私は二月にイラクに行き、このような事実が世界の中で全く無視された状態で放置されているというところに非常にショックを受けました。それ以来なんとかこの事実を多くの方に伝え、一人でも多くの患者さん、特に子どもたちを助けたいという思いで活動して参りました。薬品を送る活動はもちろんですが、イラクの医療現場で最前線に立っているイラクのお二人の医師に、イラクの現実を語っていただきたいと思い、来日していただきました。今回多くの講演等を通じて、「助けたい」という気持ちを非常に多くの方にもっていただいていると思いますので、両医

師に具体的にどういう支援ができるのかとお聞きしました。お二人のお答えは「医薬品の支援はもちろんありがたいですが、単に『何が必要ですか』と聞くだけではなく、医師を中心としたグループでイラクの病院に来て下さい。状況を見ていただいた上で、イラクには何が必要か、それを決めていただきたい。それが私たちの希望です」とおっしゃいました。医療の発達した日本の医師にイラクに来てほしい。その上で、支援のプランを練ってほしいということをおっしゃっていました。どうか、こういったことも含めて継続的なご支援をいただきたいと思います。

両医師は、日本に一人でも二人でもイラクの患者を診ていただき治療していただきたいという希望を持っています。この実現に向けても当会では活動が続けていきたいと思っています。私たちは広島・長崎をもちながら劣化ウラン弾を打ちこむ側に立った国の人間です。ですから、他国よりもイラクの患者さんたちを支援していく義務があると考えております。

今後とも、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

いまイラクで何が起きているか

劣化ウラン弾がもたらした子どもたちの後遺症

フォトジャーナリスト 森住卓

核戦争に反対する医師の会は五月十日、フォトジャーナリストの森住卓氏を招いて二十一周年記念講演会を開催した。会場の愛知県芸術文化センター十二階の「アトス・スペース」には百九十人余りが詰めかけ、森住氏が現地イラクで取材し撮影して来た写真を息を詰めて見ながら、生々しい報告を聞いた。

イラクという国

イラクは、メソポタミア文明を育んだチグリス・ユーフラテス川が国土の真ん中を流れペルシヤ湾にそそいでいる。東のイラン、西のサウジアラビアと国境を接し、一九九一年、湾岸戦争の発端となったイラクのクウェート侵攻のあとクウェートとの国境には非武装地帯が設けられている。イラクの面積は日本の一・二倍、人口は二千万人で、首都のバグダッドはチグリス川を挟んで西岸に政府官庁、東岸に市街がある。

湾岸戦争で初めて使われた劣化ウラン弾

今も戦車の残骸が放置されたまま、砂漠の放射能汚染地帯

私は五年前からイラクへ取材に行っている。国連の管理下にある

砂漠のイラク・クウェート非武装地帯へは、政府の許可がなければ立ち入ることはできない。二回目の取材で初めて許可が得られ、ここで、湾岸戦争から十二年たった今もアメリカ軍の攻撃で破壊されたイラク軍の戦車の残骸があちこちに放置されているのを見た。数珠もある戦車の装甲には五ツもの丸い穴があき、足元には三〇ミ機関砲の劣化ウラン弾が転がっていた。ひっくり返して見ると黄色い粉をふいており、放射線測定器は通常の百倍もの数値を示した。

劣化ウラン弾は、本来なら放射性廃棄物として厳重に保管管理しなければならない。核爆弾や原発燃料用に濃縮した残りカスのウラン二三八を、鉛の一・七倍も重い性質を利用して兵器に使い「消費」してしまおうと開発されたものだ。命中した劣化ウラン弾は摩擦熱で気化して空中に拡散、砂嵐の砂と一緒に落下して空も大地も地下水も放射能で汚染する。

アメリカは湾岸戦争で初めて劣化ウラン弾を使った。その量は三百一八百ポンド、広島に落とされた原爆の放射性物質の一万二千倍と言

われる。この非武装地帯は国連によって「放射能汚染地帯」に指定されている。

汚染地域に、トマト農家やベドウィン族が

驚いたことに、この立ち入り禁止のはずの非武装地帯で、農業を営んでいる人々がいた。

彼らは長年ここに住んで、ポンプで地下水を汲み上げトマトや野菜を栽培していた。このトマトは年に二千箱もイラク各地に出荷されているという。土も水も汚染されているだろうに、大丈夫なのだろうか？

戦車の部品を売る

他にもこの地域で暮らす人々がいる。砂漠を遊牧しながら移動するベドウィンだ。彼らは放置された戦車を解体して金目の部品を外し（写真）町で売りさばく。こうして放射能で汚染された金属類が都市に持ちこまれ汚染が広がる。

実際に私は、砂漠で見た戦車に付いていたキャタピラと同じ車輪が、青い色に塗られて手押し車の車輪に変身しているのをバグダッドで写真に撮った。



癌の発症や死亡、奇形児の 出産が急増

湾岸戦争後、イラクでは癌や白血病が激増した。

イラク南部のバスラは、湾岸戦争最大の激戦地だった。劣化ウラン弾も集中的に使われた。バスラのサダム教育病院のドクトル・ジャワード（来日講演の内容を五〇七頁に掲載）は癌で死亡した人を経年の記録している。

戦争前の一九八八年に癌で死亡したのは三十四人だった。それが二〇〇一年には六百三人、十八倍にも増えている。ピークがいつ来るのか、全く分からないと彼は話していた。

子どもたちの白血病

バグダッドのマンスール小児病院には湾岸戦争後、白血病専門病棟がつけられた。しかし厳しい経済封鎖で必要な薬剤が輸入できず、医師の技術は高いのにまともな医療ができない。入院費は無料でも薬は親が高いお金を出してどこから手に入れないかならない。

白いシヨールのサファア

私がマンスール病院の玄関で出会ったサファア（編集部注：ニューヨークタイムズの「イラク攻撃反対」の意見広告にも使われた有名な写真の少女）は、頭に白いレースのシヨールをかぶり素晴らしい笑顔で退院を喜んでた。傍らにいた母親がそと「薬がなくなったらから病院にいても仕方がないの」と言った。チグリス川から吹いて来た風がサファアのシヨールを剥ぎ取ったとき、副作用で毛髪のない頭が見えた。

産科病院で起きている異常

産科病院では先天的な障害や奇形のある新生児が次つぎ産まれてくる。バスラの病院では、月千人くらい産まれる新生児のうち三十



例は先天異常だという。そこで、医師が撮った二〇〇一年の九・十月に産まれた障害児や奇形児の写真四十枚ほどを見せてもらった。

バグダッドの産科病院へ取材に行った日、産まれたばかりという無脳症の赤ちゃんのところへ連れて行かれた。脳が半分も飛び出していて、口から泡を吐き荒い呼吸をしていた。母親は出産した後ショックで逃げ出してしまったという。

あまりの姿に躊躇したが、医師が「早く撮りなさい、この子はあと三十分もすれば死んでしまう。知ってもらふことにこの子の生まれてきた意味があるんです」ときっぱりと言った。

隣の保育器には脊椎分離症の赤ちゃんが入っていた。

外に出ると、産まれてすぐ死んだ水頭症の赤ちゃんを抱いた祖母に出会った。

栄養失調が多く、産まれたときよりも体重が減って生後四カ月なのに骨と皮ばかり、手の施しようもないという赤ちゃんもいた。

アメリカは、イラク戦争で何をじたか

私は、アメリカがイラク攻撃を開始した翌日の三月二十日、イラクに向かった。

四月一日に一旦帰国した後、再び四月十一日、アメリカが無理やり強行したイラク戦争の痕を記録しておきたいとイラクに行った。バグダッドの街は、あちこちで黒い煙が上がり、空爆や市街戦で破壊されて変わり果てていた。

病院も略奪や攻撃を受けて薬はなく、医師も危険で病院に行けないため機能がマヒし、負傷者が運び込まれても治療もできない状態だった。クラスター爆弾で全身傷ついた少女と弟が運び込まれてきたのに出会った。この姉は、痛みのおかげでアメリカの仕打ちへの怒りを叫んでいた。

取材をされていて、アメリカ軍はマンスールなどの公立病院の略奪に対しては放置する一方、キリスト教系の病院には戦車も配置し警備している違いに私は気がついた。赤十字の病院に对照する赤新月社の病院への扱いも同じである。

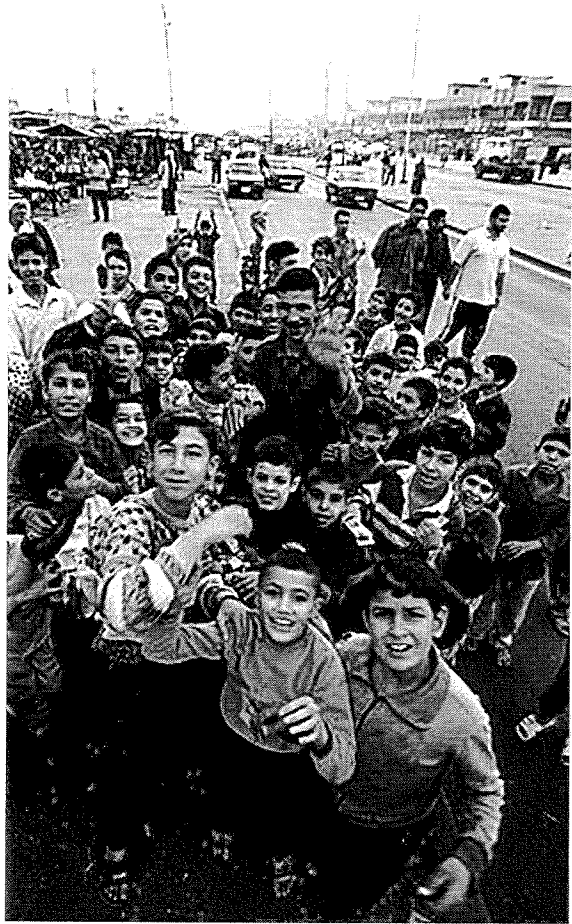
警備について言えば、アメリカ軍は政府の建物の略奪を放置する一方で、初めから石油省と石油関連施設だけは厳重に守っていた。

アメリカの狙いがどこにあるか、露骨に示している。

略奪の真相

バグダッドではあちこちで略奪が横行し、あの理知的でやさしいイラクの人たちが何故なんだとやり切れない思いがして、略奪現場は取材しなくなかった。イラク人たちにも、その現場を取り巻いて悲しそうに見ている人たちがいた。

あの混乱の中で、現場では全体像が見えない。日本に戻って調べていたら、『人間の盾』をやっていたスウェーデン人が新聞で証言している記事を見つけた。



彼によれば、市街戦が始まったときに居合わせた政府の建物のある場所へ、米軍の戦車が来て警備に立っていた二人のスーダン人を撃ち殺した。そして扉を破壊して開け放ち、通訳を介してアラビア語で「中にあるものを自由に持ち出してよい」とスピーカーで呼びかけたという。始めは恐る恐る出てきた住民が、そのうち先を争って略奪を始めたと言っている。

また、米軍のトラックが刑務所に乗りつけて、収監されていた窃盗犯などの犯罪者四百人を街で放免したという話も言われている。なぜアメリカはこのように汚い手

口を仕組んだのか。

私は、メソポタミア文明から続くイラクの文化や歴史への誇りを傷つけ、イラク人のアイデンティティを奪うことを狙っているのではないかと思っている。

劣化ウラン弾の被害の実相を一刻も早く明らかに

アメリカは正式には認めていないが、今度のイラク戦争で二千万の劣化ウラン弾を使ったといわれる。今後その被害は百万人に表れるだろうと推定されている。すでに湾岸戦争の深刻な被害が出ている。その上に今回の被害が加わったらどうなるか？ 占領軍であるアメリカが、隠したり、被害を明らかにするのを妨害しないか心配だ。隠される前に早く調査をすることが必要だと思っている。

参加者の感想から

◇「イラク戦争の中の子どもたち―（いのちと健康）の視点から」をテーマにゼミナールを行っている大学教員です。とくに経済制裁がイラクの子どもたちの（いのち）と健康をおびやかす、そのメカニズムと実態が知りたくて参加しま

した。写真の力を実感しました。私たちにどう伝えられるか、大きな課題です。

◇「全てが危険、たまたま安全だっただけ」という条件の中で、果敢に撮影されてきたお話は興味深いものでした。イラク戦争を「ジャーナリストの立場として現場の声を伝える仕事」という信念で戦争を伝えて下さった、その事に共感を覚えました。

◇報道の仕方がいつの世も自分勝手なやり方の方です。毎日、テレビではイラクのことを流しているが、やられているイラクの方が悪いの？と言いたくなるような気がする放送だと思いましたが、気のせい？ アメリカは今までのいろんなところで戦争をやっています、日本のようにアメリカにいいなりの国はありません。イラクを日本のようにしたいのでは？ 日本人はもっと自分のことを主張できる国民にならないといけないのでは…。有事法制は絶対に通させてはいけません。イラクの人たちのためにも今日のお話をもっとたくさんの人たちに聞いてほしいです。



核戦争防止国際医師会議 北アジア地域会議の印象

土井 敏彦

十月四―五日に開かれた第四回核戦争防止国際医師会議（IPPNW）北アジア地域会議は、京都に似つかわしくない駅ビルを抜けた「キャンパスプラザ京都」が会場であった。

核戦争防止国際医師会議（略してIPPNW）は、二年に一回総会、その間に各地域の会議を開いている。北アジア地域会議は日本・中国・韓国・北朝鮮の四カ国で構

成されている。しかし、今回の会議は韓国・北朝鮮が不参加で、中国の発表も一人で、モンゴルの報告もあったが、当事者の参加という点では物足らなさを感じた。

会場に入ってまず、演壇横に飾られた七色の旗にびっくり。„PACE“の文字はイタリア語で「平和」。今年五月に私がイタリア旅行の時買ってきた旗と同じではないか！ 持参したのは会長のマッコイさんと思われ、以後非常に親近感を持つてしまった。

紙面の都合で、以下に印象に残った会議の内容を紹介。詳しくは事務局に資料あり。

①マッコイ氏の基調講演「今日の核の脅威と我々に課せられた使命」。総括的な話で、アメリカの単独行動主義の批判を強調して、よく納得できた。

②ピースデポ代表梅林宏道氏「冷戦後のアメリカの核戦略」。核態勢見直しで、使える核兵器・システムを整備しているなど、危険な内容の紹介。

③九大の高山氏。「日本イラク医学会議」を立ち上げて人道的立場でイラク交流・支援をしているという、すがすがしい話だった。

④午後の基調講演、韓桂玉・大阪経済法科大学教授は、北朝鮮に関わる問題の経過を細かく報告。大変参考になった。

⑤最後のシンポジウムは、おなじ

み立命館の安斎教授の座長であり、各演者も真剣に核廃絶、北東アジア非核地帯化構想にふれて発言された。最後に「京都宣言」を採択し閉会した。

京都宣言

北東アジアの緊張緩和と非核化をめざして

京都 2003年10月5日

広島・長崎が原子爆弾で破壊されて58年、混迷が深まる国際情勢の中、戦争や紛争、テロは多発し、核兵器が使用される危険性はさらに深まっている。

特に、2001年9月11日の米国同時多発テロ以降、テロによる無差別攻撃、それに対処する武力攻撃は後を絶たない。米国は一国主義をますます強め、核兵器による先制攻撃も辞さぬ構えを「核体制見直し」（Nuclear Posture Review＝NPR）に明記するにいたった。

米国により「悪の枢軸」と名指しされたイラクは、米英軍主導による武力攻撃を受け、戦争終結半年以上を経た現在でも、甚大な被害を受けたイラクの人々や環境はいまだ適切な対応もなく放置されたままである。

「悪の枢軸」と名指しされたもう一つの国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）は核開発を言明し、瀬戸際外交を展開している。北東アジアに住む我々は、この地域の紛争・戦争を対話と協調により予防し平和共存を模索しなければならない。

21世紀がこれ以上核兵器の使われることのない、そして紛争や戦争が繰り返されることのない世紀となるよう、今こそ京都から世界に向けて、「IPPNW北アジア地域会議」は核兵器・大量破壊兵器廃絶の声を大にして発する。

《原爆症認定集団訴訟》

被爆に起因する疾病は

原爆症と認めよ

寄稿

愛知弁護士事務所 樽井 直樹



名古屋地裁で挨拶する
樽井弁護士

アメリカ合衆国によって、広島、長崎に原子爆弾が投下されてから五十八年を迎えた。

ところが、被爆から五十八年も経った今、原爆症認定却下処分取消などを求めて全国八地裁に百名もの被爆者が訴えを起こしている。被爆者たちは、今何を訴えようとしているのか。

一九九四年、被爆五十周年を前に「被爆者の援護に関する法律」が制定された。この法律が制定されたことにより、被爆者に対する救済制度は基本的に整備され、実施されているものと、少なくとも

国民は信じている。

しかし、「援護に関する法律」は、原爆二法といわれた「被爆者医療法」（一九五七年制定）と「被爆者特別措置法」（一九六八年制定）を統合したものであり、制度的には従来の制度を踏襲したものすぎず、運用の実態も全く変わっていない。被爆者が求めた、「国家補償による被爆者援護」は実現していない。

また、給付の内容も生活保障を欠くなど不十分なままなのである。

原爆症と認定されることへの、被爆者の特別の思い

「援護に関する法律」の制定によっても、国は、被爆者を本気で支援する立場に立とうとはしなかった。そのことが集中的にあらわれているのが原爆症認定行政の運用実態である。

原爆症認定制度とは、「援護に関

する法律」一〇条、一一条に基づくものである。

原爆症と認定されるためには、①被爆者の負傷・疾病が原子爆弾の放射能に起因すること（起因性）と、②現に医療を要する状態にあること（要医療性）の二つの要件を充たさなければならない。原爆症と認定されれば医療特別手当（月額約十三万円）を受給することができるのである。

原爆症認定制度は、原爆二法のころから存在していた。そして被爆者は原爆症と認定されることに特別の思いを持っている。

それは、単に医療特別手当という経済的給付を求めたものではない。原爆症は、厚生労働大臣が認定する。被爆者にとって、自分の苦しみが原爆によるものであるということを国から認めてほしいと願っており、それを認めさせる唯一の制度が原爆症認定制度なのである。

しかし、国は原爆症認定に厳しい姿勢を取り続けてきた。二〇〇一年三月末の時点では、原爆手帳を持っている被爆者（「法律上の被爆者」）は全国で二八万五六二〇人いたにもかかわらず、原爆症と

して認定されていた被爆者はわずか二〇八二人にすぎず、法律上の被爆者にしめる認定被爆者の割合はわずかに〇・七六%にすぎないという状況である。

DS86と「原因確率論」の矛盾と非科学性

原爆症に認定される被爆者がこのように極端に少ないのは、厚生労働省（旧厚生省）が起因性に関してきわめて厳しい基準を持っていたことにある。

この基準とはDS86といわれる被曝線量評価に基づいて、急性症状が発症するしきい値を求めるというものであった。しかし、DS86によれば発症しないはずの被爆者に急性症状が多数発症していたのである。このように、厚生省が採用していた基準は、現実に被爆者に起こった被害を説明できない非科学的なものであった。

この点については、裁判でも争われた。特に、長崎の被爆者である松谷英子さんは十二年をかけた裁判をたたかいぬき、二〇〇〇年七月十八日、最高裁で認定申請却下処分の取り消しを命じる判決を勝ちとっている。この最高裁判決

は、厚生省の基準を機械的にあてはめることを厳しく批判したものである。

この判決によって厚生労働省は従来の基準を維持することができなくなった。そこで持ち出されたのが「原因確率論」と呼ぶべき基準である。この基準は、DS86に立脚して被曝線量を推定し、推定被曝線量と被爆時の年齢によって、被爆者が罹患した疾患が原爆放射線の影響を受けている蓋然性を求めようというものである。

しかし、この基準も松谷訴訟で批判されたDS86に立脚するものであり（残留放射線による被曝や放射性降下物を過小に評価しており、遠距離被爆者や被爆後広島・長崎市内に入った入市被爆者の被害を過小に評価することになる）また原因確率の算定根拠となつてゐる放影研の調査自体にも多くの問題点がある（たとえば、疫学調査においては暴露群と非暴露群を対照することが不可欠であるが、非暴露群の中に遠距離被爆者や入市被爆者が含まれているといった問題がある）。仮に、前記松谷訴訟の原告にガンが発症したとしても、原因確率はきわめて低いと評価さ

れ、認定されない結果となるのである。

結局、国の姿勢は何も変わつていないのである。そこで、国の認定行政に対する姿勢そのものを変えさせるためには、集団訴訟を展開していくしかない。

そのために、全国で多くの被爆者が集団訴訟に立ち上がったのである。

愛知では入市被曝への認定を求める甲斐さんの裁判が

愛知では、全国の先陣を切つて四月十七日に甲斐昭さんが提訴した。甲斐さんは、当時海軍潜水学校の練習生で、原爆投下時には爆心地から約二十km離れた大野浦にいたが、救援命令を受けて、原爆投下から約二時間後には広島に入市し、八月七日の夕方まで、爆心地付近で救援活動に従事した。甲斐氏はその後下痢などの急性症状におそれ、戦後も脱毛や頸部リンパ腫など様々な病気に見舞われた。そして、甲状腺腫瘍（悪性リンパ腫）の術後後遺症による甲状腺機能低下症に苦しんでいる。

海軍潜水学校に在籍した当時壮健な肉体をもつた十八歳の少年が、

八月六日、七日の広島市内での救援活動を機に、次々と体調不良に見舞われ、現在に及んでいる。これが、被爆の影響でないといえるであろうか。しかし、前記原因確率論によれば、甲斐氏の原因確率はほとんどゼロと評価されることになるのである。

愛知甲斐訴訟は、来年四月まで五回の弁論期日が予定されており、全国でも先頭を切つて進行している。九月には、国から原因確率論の科学性・合理性を主張した大部の書面が提出され、これに対する反論の準備に入っている。

弁護団は、「核戦争に反対する医師の会」とも緊密に連絡を取り合い、医学的な知見に関するアドバイス等も受けてきた。この場をお借りして、今までのご尽力に感謝申し上げるとともに、今後ともご協力をお願いする次第である。

戦後、ねばり強かったかい 続けてきた被爆者に、裁判 で最後の勝利を

被爆者は、被爆者の救済と核兵器の廃絶を求めて戦後ねばり強くたたかってきた。その中で、いくつかの裁判も起こされてきた。

松谷訴訟のように、認定申請却下処分の取消を求めた裁判がその類型の一つであるが、ほかにも重要な裁判がある。

たとえば、原爆投下についての国家賠償を求めた下田原爆訴訟。この裁判で東京地裁は、原告の請求を退けたものの、原爆投下が国際法違反であるとの画期的な判断を示し、国内だけではなく国際的な影響を与えることとなった。

また、在外被爆者に対する原爆手帳の交付や原爆症認定を拒否する処分の取消を求めた一連の裁判において、裁判所は、援護に関する法律などが国家補償的性質を併せ持つことを確認して、日本国に在住しないことをもって被爆者の救済を拒否した国の姿勢を厳しく批判した。

原爆症認定集団訴訟弁護団は、原爆訴訟の積極的な伝統を受け継いで、訴訟の場においては厚生労働省の採用する原因確率論の非科学性を徹底的に暴露し、すでに高齢を迎えている被爆者に対する本格的な救済を早期に実現するよう、国の姿勢を変えさせる運動を大きく展開して、その裁判を勝ち抜きたいと考えている。

被爆者支援ネットワークに

ご入会を

- ◆あいち被爆者支援ネットは、被爆者集団訴訟の勝利、被爆行政の転換、核兵器廃絶をめざす活動をすすめています。反核医師の会も、ネットを支える活動をしています。先生もぜひご入会ください。

会費：1口＝1000円

*何口でも歓迎です。

- ◆入会申込み用の支援ネットのチラシを同封しています。入会・会費納入・募金の振込用紙と一緒に刷り込んでありますので、これをご利用ください。またご友人等に入会をお勧めくださる方には、追加のチラシをお送りしますので、事務局までご連絡ください。(TEL 052-832-1345)

私は、原爆の投下直後に軍の命令で広島市に入り、被曝した入市被爆者です。当時十八歳で、大竹海軍潜水学校大野浦分校の練習生でした。

甲斐裁判 第1回口頭弁論での
本人陳述より

私の病気は、原爆が原因だと認めてほしい

甲 斐 昭

昭和二〇年八月六日潜水学校の課業中に原爆が落ちました。そのわずか一時間ほど後に、「今から広島に行き救援活動を行う」という上官の命令が下り二十五名ほどで軍用トラックで広島に行きました。己斐駅付近からは道路が危険だということ、電車の線路沿いに福島町、十日市町を経由して爆心地付近まで歩いて行きました。その途中での光景は無残で、とても言葉で言い表すことはできません。思い出しても涙がでます。六・七日の二日間、死体の収容、負傷者の救出などの作業を行い、六日の晩は十日市町付近で野宿し、七日の夜、大野浦へ帰りました。

「公正な裁判と、一日も早い判決を。被爆者の症状を『原爆症』と認めて下さい」の署名にぜひご協力を

裁判所に提出する見出しの署名を、同封しています。被爆後五十八年が経ち、被爆者たちは高齢化して「自分たちの最後の闘いだ」と決意されています。ぜひ署名いただきご返送ください。

その後、頭髮が抜ける、下痢をするなど後遺症に苦しみました。さらに頸部リンパ腫で苦しめられ、何度も再発したので繰り返し手術を受けなければならませんでした。いつも体がだるく、倦怠感や肩・首の痛みに悩まされ、就職してもまともに働くことができず、月に二十日も出勤できれば良い方という時期もありました。平成八年まで被爆者手帳がもらえなかったため、高額な治療費を支払わなければならず、妻や父に苦労をかけたのが今でも辛くてなりません。

平成八年に手帳をもらってすぐ、「私の病気は原爆が原因であると認めてほしい」と原爆症の認定申請を行いました。しかし、同九年、国はこの申請を却下しました。直ちにこの処分は納得できないとして異議申し立てを行いました。その後、何の回答もないまま放置され、五年半も経った今年（平成一五年）一月に「申立てを棄却する」との回答がきました。

私は年金も恩給もないので生活保護で暮らしています。なぜ年金がないか分かるでしょうか。原爆のせいです。人生の半分以上が病院通いでまともに働けず、年金を掛けることもできなかったからです。

私は国の命令で、被爆直後の危険な広島市内へ、それも最も危険な爆心地近くで作業をして被曝したのです。入市被爆者だからといって棄却する理由はないはずです。どうしても納得できません。私の病気は「原爆が原因であると認めてほしい」これが私の訴えです。私と同じような立場にいる被爆者を苦しめるのはやめて、今すぐ原爆症と認定をしてください。

原水爆禁止2003年世界大会

核兵器も戦争もない世界を

平和の声と行動で地球を包もう

原水爆禁止二〇〇三年世界大会・

長崎が八月七日〜九日、「核兵器も戦争もない世界を―核兵器の使用、開発を許さず、すべての核兵器の廃絶を戦争と先制攻撃の政策反対、世界平和のルールをまもう―」をメインテーマに、被爆地の長崎市で開催された。

大会には、六十人の海外代表をはじめ、七千三百人が参加。開会総会、閉会総会ではそれぞれ第二



会場まで埋め尽くした人の約六割が若者という、これまでにない特徴のもとで開かれた大会となった。

新しい核廃絶署名を提起

開会総会では、安斎育郎氏による主催者報告で、国際会議には世界二十カ国二百六十名の代表が参加し、英米による無法なイラク攻撃への糾弾、二〇〇〇年に核保有国を含めて合意された「核兵器廃絶の明確な約束」の実行を求める声がますます強まっていること、新たな署名「いま核兵器の廃絶を―ヒロシマ・ナガサキをくりかえさないために」が提起されたことが報告された。

また、原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員の山口仙二氏が来賓挨拶をし、「からだと心に刻み込まれた原爆の傷跡はけつして癒えない」「原爆はいまなお被害者を殺し続け、さらにアメリカの劣化ウラン弾のヒバクシャなど多くの核被害者が生み出され苦痛のうちに放置されています。これ以上ヒバクシャをつくらせてはな

りません」と力強く訴えた。
青年の集い、女性の集いなど多彩な関連行事も

八日は長崎市内各地で、動く分科会を含む十二の分科会、政府代表とのフォーラム、関連行事として若者の集い「PEACE JAM 2003 NAGASAKI」、核兵器なくそう女性のつどい二〇〇三、被爆の実相を後世に伝える「つたえようヒロシマ・ナガサキ二〇〇三 長崎」など五つの企画が催された。

ヒロシマ・ナガサキの苦しみ を再びくりかえさないために

閉会総会では、大会運営委員会の高草木博氏（原水協事務局長）が行動提起の中で新しく提起された署名について次のように述べた。

「この署名は第一に、『いま、核兵器廃絶を』の表題に見られるとおり、被爆六十周年、二〇〇五年に向けて、核兵器廃絶へ国際政治を動かそうとの、明確な目標と強い意志を表しています。第二に、この署名は、核兵器廃絶の明確な目標とあわせて、核保有国にみずからおこなった「核兵器廃絶の明確な約束」を実行させ、国際条約

の締結で核兵器廃絶を実現するというはつきりした道筋を示しています。第三に、この署名は、世界諸国民が、超大国の不正義に対して圧倒的な力を発揮した新しい情勢の下で、核兵器廃絶を実現する新しい無尽蔵のエネルギーを結集する署名です」。

また、イラク人医師ジャワード・アル・アリ氏、ジャン・ハサン氏も登壇し、米軍の使用した劣化ウラン弾により湾岸戦争以降、ガンや異常出産が増えていることなどが報告された。

大会は最後に「長崎からのよびかけ―いま、核兵器の廃絶を」が提起され、参加者は拍手で賛同した。早速その場で新しい署名をする人の姿も見られた。（〇）

「いま、核兵器の廃絶を― ヒロシマ・ナガサキをくりかえさないために」署名にご協力を

今年の原水爆禁止世界大会で提起された二〇〇五年の被爆六十周年めざして取り組まれる核兵器廃絶を求める署名用紙を同封しました。ご署名のうえ、返信封筒をご利用いただきご返送ください。

本号のジャーナルは盛りだくさん

お読みいただいてぜひご協力をお願いします

本号は盛りだくさん、一六頁の

記事となりました。会員の皆さまへのご協力のお願ひも、署名が二つに入会と募金のチラシ。お読みいただいてぜひご協力ください。

○イラク人医師と語り合う会

湾岸戦争後の子どもたちの健康被害と、イラクの今

……ジャナン・ハッサン

ジャワード・アル・アリ

○いまイラクで何が起きているかー

劣化ウラン弾がもたらした子どもたちの後遺症

……森住 卓

○原爆症認定集団訴訟

原爆に起因する疾病は原爆症と認めよ……弁護士・樽井直樹
私の病気は、原爆が原因だと認めてほしい……原告・甲斐 昭

○署名のお願い

①公正な裁判と、一日も早い判決を。被爆者の症状を『原爆症と認めてください』

②いま、核兵器の廃絶を

ヒロシマ・ナガサキをくりかえさないために

○入会と募金のお願い

被爆者支援ネットにご入会を

●会費納入のお願い●

二〇〇三年度の会費がまだ未納の方には、納入をお願いいたします。該当の方に郵便振込用紙を同封しておりますのでそれをご利用いただくか、または次の銀行口座あてお振り込みください。年会費は五〇〇〇円です。

UFJ銀行・八事支店 普通預金108-297

「核戦争に反対する医師の会」

*すでに納入済みの先生への間違いや、不明の点などございましたらお手数ですが事務局までお問い合わせください。

☎ 052-832-1345

記録映画「ヒバクシャHIBAKUSHA 世界の終わりに」

上映会と講演のつどい

□と き：12月14日(日)午後1時15分から

□ところ：名古屋市博物館講堂(地下1階)

地下鉄桜通線「桜山」下車、4番出口から徒歩5分(TEL 052-853-2655)

□内 容：★映画上映(上映時間116分)

★講演：医師 肥田舜太郎氏

(日本被団協被爆者相談所理事長)

肥田さんは軍医として勤務していた広島で被爆。戦後は一貫して被爆者の治療と救済、その大もととなった核兵器の廃絶を訴えるために、日本だけでなく世界を駆けめぐってきた方です。この映画の制作にも協力しています。

□上映協力券：1,000円

*医師の会事務局にお申し込みください。

監督：鎌仲ひとみ

制作：グループ現代

◇確実に世界をおおい尽くそうとしている国境のない核汚染。使われる側にも、使う側にも等しく被害をもたらす核。普通に生活している人々が知らぬ間に被曝し、ゆるやかに殺されていく現実。この映画は、見る事も感じる事もできない放射能汚染の環境のもとで生きるイラク、アメリカ、日本の人々の日常の姿を記録し、彼ら被爆者の声を伝えるために作られた。

〔主催〕被爆者支援ネットワーク

(愛知県原水爆被災者の会内)

TEL 052-991-3044